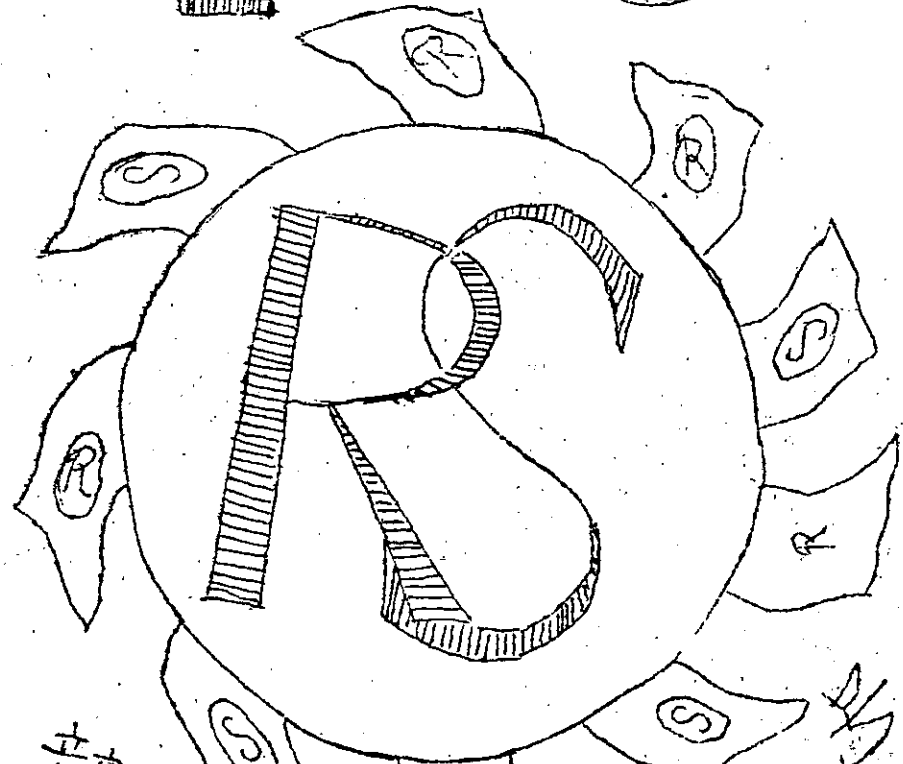


大正

二月



技

技

会

紀

念

No. 1

4

3

7

ウサンニモ、ウチヘカヘデシカ
フレマシタ。

●ベンキウノコト、フジタキシツコ

私ト オケイケント マイバンマイ
バン ベンキウニ イキマス、ソシ
テ私がオケイケンノ ウチニ ムカ
ヒニイクト オケイケンハ ゴハン
ラ、タベテ 弁マス、ソシテ ワタク
シハ、オケイケンガ ゴハンヲタベ
テシマフマデ、マデ弁マシタ、スル
ト、オケイケンノヨバサンガ、
コイケンニ イツデモ、マタシテ
弁ルノニ、オケイハ、ヘイキデ、ゴハ
ンヲタベテ弁テネ、トイヒマシタ。

●アズマヤノコト、ヒラノマサヨ
ノメイハ、私ヲナト、アズマヤニイ

キマシタ、ソコデ、サンジュツ、ラシ
マシタ、ヨシヒコトキンボトハミキ
デナイトコロラアルイテ、センセイ
ニシカラレマシタ、ソウシテ、シ
チウノ、トコロカラ、ガウヘキ
マシタ、ソウシテ、ベンキウ、シマ
シタ。

●山ノコト、キクニスエ

私ハオカアサントネエケント山ハ
ベンタウモチデイキマシタ、山マデ
イクト、イロイロノ花ガタクサンサ
イテ、弁マシタ、オカアサンハトマ
トヤヤサイラツタリマシタ、私タチ
ハ、レンゲノ花ヲトリマシタ、ソウシ
テ、ユフガタ、カヘツキマシタ、レ
ンゲハ、ハトリニヤリマシタ、ソウ
シテ、オフコニハイリマシタ。

●三
私はつくどです、佐々松男

私のそばには、正一と一郎の二人が
おます。ときどき、いたづらをします。
今日も二人で、けんくわをして、おま
した。ときどき、ぼくに、すみをつけた
り、ないふで、ついたりして、こまりま
す。なんにもしないのに、すみをつ
けたり、ないふで、ついたりするとき
は、おこつて、やりたいと思ひますが、
こえを出すことが、できないので、
いつと、がまんをして、おます。し
かし、二人とも、よく、べんきようをし
ますから、大きくなつて、から、きつと
えらくなることと思ひます。どう
か、二人とも、えらくなつて、下さい。

私は犬です、佐々木ミス

私は、ワンワンとほえます。それから
まりがあるとき、くわへて、にげます。人が
おくわしを、なげると、かけて、いつ
て、ます。また、よその、うちへ、かけて、い
て、ワンワンと、ほえることも、あります。
私は、ネコや、ネズミを、おひまは、すこ
が、一番、すきです。

私はどうぼうぬすみます、浅沼敏一

私は、ネコを見ると、すぐに、にげ、て、い
ます。ネコが、おないと、きは、だ、い、ど
こ、や、ん、じ、よ、う、で、いたづらをした
り、かけまはつたり、します。そこへ
ネコが、くると、私は、一、も、く、さん、に、に、げ
て、い、き、ま、す。私は、ネコが、一、番、す、き、な、い
と思ひます。また、私の、一、番、す、き、な、い
のは、やつまで、す。やつまを見れば、と

んでいってたべます。もし、えは、
ねこがおためら、とんでいって、えん、
下に、はいってしまひます。

私はネコです。 水村タケ
私は此の間、ねずみを 見つけま
したけれど、たべたくはなかつ
たので、おともだちに、やらうと思
つて、おともだちのうちへ、いきま
したら、おませんでした。しかた
がないから、うちにかへつてみ
たら、ねずみがいたづらをして、
いました。そこへ私が、来ました
ので、いそいでにげて、いきました。
私が、あとを、おっかけて、いくので
ねずみは、足が、だるくなつたと
みえて、とうとう、つかまへまし

三のつづり方

小母様 寛
おかはりございませんか。

又四子、蒲花では次すきなみりん
ぼしを、おりがたうございませう。
小母様の方は、さむいでせう。こち
らも、いつもさむいでせう。こち
らが、こんなに寒いのに、小母様の方は
とんなに、暖いのでせう。

小母様、三言には、又行きませうから
その時は、中野に居て下さい。僕は
おはりがありませんが、小聲さまは
危がいたくありませんか。又正樹
君や、直樹君には、おかはりございま
せんか。みりんぼしの箱にあつた

息を、久笑ときよしが、見て、
「上手だね」といつて、居りました。
では、おからだを、大切に、して、
下さい。正樹君、直樹君に、よろしく、おつしや
つて、下さい。さようなら。

二月七日 寛より

小母様

今朝

奥山登(登子)

私が、おきて、時計を見ると、五時半で
した。私は、まだ、は、やいと、思つて、すこ
し、おて、おきました。すると、妹が、私の、か
ほを、手で、うちました。私は、びつくり
して、おきて、見ると、六時でした。私
はい、と、とき、だつたといつて、庭へ、で
見ると、い、天気でした。かい、かんに
いつて、見ると、い、氣持でした。私は

かいがんでしばらく砂をいぢつてあ
ましたが、家へかへつて、かほを
らつてごはんをたべてをれがらまり
をもつて學校に來ました。

△あかちやん 金川 恒男

僕のうりにほあかちやんがいます。
僕がごはんをたべてみると、かさこ
は、ちようだいをしますから、僕が
ごはんをやりますと、かさこはかほ
いらしく小さいこえで、あかちやん
といひますから、かほいらしうござ
います。
そしておとうさんがしごとから、か
へつてくると、かさこはおとうさん
のところへいきまます。

△石本シテ 正弘

シテ、オホシテがアツク。

尋 四 綴 方

福岡雪子さんをおもひ

石津若子

日頃私達と仲よくしあつておた福岡雪
子さんが聞くも怒りしいゆえちよう
いふ病が元で病院に入院しました。先
に病院で二週間程苦しめて二月十八
日の朝早くなくなりました。いつもは元
氣な顔をして夕方競技會の練習をし
たりして毎日元氣にすごしてゐた雪子
さん、競技會をしないで死んでしまつ
たのは實に残念です。あと一ヶ月もた
れば卒業式だのにもう今は棺の中の一
人おむつてゐるので、今日も藤川先生が

ソノトキ、ウチデアソンデキルト
アメガミマシタカラ、ミチヨミル
ト、ナミガオシヨセテキマシタ。
サウシテ、カイガンヨミルト、カノ
一がーソウ、ナガレテキマシタ。
スルト、ヨソノヒトガ、ハダカニナ
ツテ、トビコンデイキマシタ。ソウ
シテ、ヒツパツテキマシタ。

△二ねこ 高松ツルカ

私のうちの二ねこは、私が學校から
かへつて、「だいま」といふと、「に
やうにやう」とへんじをします。
ねこのなまへは、ちび、といひます。
ねこは私があそびにいかうとして、
ざうりをはくと、私のようにふくをく
はへて、「にやうにやう」となまます。
「をはり」

藤川先生の歌を教へて下さつた時思
出したのは雪子さんも、あ、して歌に
迷られて卒業するのだつたのに、歌一
つ聞かぬでなくなつたのは私まで
も残念に思ひます。

○ 奥山憲一

福岡雪子さんは今年十五で、いま
一、此の三月高等二年を卒業すると
ころで、三月が急に病氣になつて去
り、十八日朝早く此の世を去られたので
私達生徒一同、悲しみは一週間で
はありませぬ。先生方はそれ以上のお
なげきでせう。雪子さんのお父さんお
母さんお兄さんお姉さん、先生のほかの
御親戚のお力添はしはどれ程でせうと
思ひます。涙が先に出て來ます。昨日
の競技會にも出られなくなりました。

雪子さんは地下でこそ残念でせう。私達
を弟として可愛がって下さった雪子さ
ん……あ、……今頃地下で何をして
居られるでせうか。

○

藤滝 清

二月十八日の朝早く福岡雪子さんはお
なくなりになりました。雪子さんの病氣
はめんあつと、いふ恐ろしい病氣だつ
たさうです。はじめのうちはあまりひ
どくなかつたのですがだんだんひどく
なつたので、親兄弟お親戚は心配して
あらゆる限り看護をいたしましたので
すがそのかゝりもなくとうとう「あり世へ
旅立たれました。本當にお氣の毒です。
雪子さんだつて今眼をつぶるまでもあ
の世へ行きたくはなかつたやせう。お親
だつてどうにかして下さりたいと思つ
たでせう。十九日の競技會にも雪子さん

が居たならば卒業生もどんなにか樂
しかつたでせうが本當にさびしく競
技會を過ぎました。先生方も私達と同
じ心持であつたと思ひます。今頃雪子
さんは地面の中でやすらかにねむつ
ておられるらうと思ひます。
此のなつかしい學校に八年間も先生
の御恩を受け今卒業の間ざわにちな
くなりになつて本當に可愛相でした。
同級生は長い年月一しよに勉強しど
れ程悲しい事だせう。お父さんやお母
さんは如何にしてあきらめられぬ
事だせう。まことにお氣の毒だと思ひ
ます。
皆さんと一しよに雪子さんの死
をかたしみます。

小じかほ

尋五の綴方

電話

板東角男

昭和八年十二月始めて此の大村にも
電話がかゝるやうになつた。僕の家にも
電話がかゝつた。初めの一週間は習
ふやうにどこにでもかけてよといふ
ふことを人にきいたので朝日などに
何回ともなくかけた。家の者が僕にも
なりへと云つたので、それからほどん
どんならつて居る内に、だん／＼なれ
て来たが、電話機が悪いせいかあまり
よく聞えない。それでも電話がかゝつ
てからはこの村も便利になつた。こん
どは電燈もつくであらう。

競技會

海野輝雄

遂から始めることになつた。僕は太

一君や新三君と、六年生の教室に行つ
て弁当を食べた。庭は廣々として白
が引いてあつた。皆と一共に外へ出
ぬると、旗分けがあるのを旗をもつて
て少し遊んでゐると鐘がなつた。一
庭に走りこんでから分れて席につい
最初のピストルの音が一霎天高くこ
つて競技が始つた。意後の旗がひら
りとひらめく。誰か顔もニコ／＼と
居る。一番初め百米に正道君が出た時
僕は力いっぱい心えんした。六對三
で負けてくやしかつた。競技はまじ
り勝つたり面白く進んで行つた。一番
最後のマラソンはほん／＼に僕はこ
いと思つた。ヨーンとなる。同時
に選手は力いっぱい駆け出した。しば
くたつと清瀬からかけて来た。そして
十二對十で僕等が勝つたのでほん／＼

はうれしかつた。しかしみんな合せでは
は更けました。

とり小屋

木村サヨ

家のとりどやがくさり始めたので

お父さんが作り直さうかよと女がま
した。とお母さんが作り直したと
云った。それで父はとりどやをつくり
始めました。とりはうれしそうにこけ
つこうと鳴いて居ます。小屋の前の方
をつつとひらげました。私もどりの
おぢさんがくれた箱なんかはこいで
てついでいきました。それをお父さんは
はして裏にはります。晩にはなるとか
れたよと女がまますから私が勉強さし
てからな、いであげると女がつたり
お父さんはよろこんで「はい」と云った。
私は勉強が保つてからな、いとおぢ

も、お父さんが、お入ましのことは
りた、いい方がましくなると云つた。
母さんは、サヨ子は、まは、一、海軍
だ、と、は、め、て、く、れ、ま、し、た、。

朝早く

黒川江

は、く、く、と、四、時、を、打、つ、音、は、目、が、つ、お
た、ま、う、御、敵、を、た、く、頃、だ、と、思、つ、た、け、れ
い、さ、む、く、と、思、ひ、れ、な、い、。夜、の、や、で、眠、る
開、い、て、居、る、と、隣、の、部屋、か、ら、は、ぐ、う、ぐ
う、う、い、い、が、き、が、き、こ、え、て、く、る、。私、は、何、か
か、さ、び、し、く、思、つ、た、。家、の、中、は、ま、つ、く、ら
が、一、寸、先、も、見、え、な、い、。ま、の、う、す、み、お
き、れ、と、女、の、声、が、き、こ、え、た、の、で、ど、き、起
きて、台、所、に、行、く、と、ま、こ、も、ま、つ、く、ら、な
め、や、ま、し、た、ま、つ、く、ら、の、パ、ー、ン、と、ま、つ、
子、を、す、る、と、思、は、お、大、り、が、明、も、く、る、つ
た、お、ぢ、の、お、ぢ、り、ん、は、お、つ、た、。

尋 方 六 段

競技会

兎玉章一

二月二十日待ちに待った競技会も未
た。今日は日本晴だった。一時から始ま
った。私等は夢中になつて居る。どんく
進んで三時が四時頃に終つた。今思ひ
出して一、番、勇、壮、だ、つ、た、の、は、看、者、や
文、庫、君、だ、つ、た、。大、き、い、人、と、戦、つ、て、ま、
く、も、へ、こ、た、れ、な、か、つ、た、と、思、ふ、。未、年、こ、
そ、は、選、手、を、う、人、と、勵、し、て、勝、ち、た、い、い、も
の、だ、。

俳句

浅沼鉄大

投げやらぬ

砲丸一つも黒い顔

競技会を終へて 森方秀作

二月二十一日の競技会はず業組四男
の勝であつた。其の中のマラソンであ

る、僕等はやぐらの上の所で応援しよ
うと思つて居ると小便が出来なくなつ
たので章一と一いふに「はい」つた。

すると章一が「僕いつともこゝで小便し
ておくらぬ」と言つて居る中に選手
は通つた。水田先生が向ふから来る。

「おい、ちいられると、い、い、から、こ、の、樽
の中へ隠れよ」と云つて正一等と一
いふに「かくれぬか」と云つて正一等は通つ
た。応援にいつた僕等は逃げた。いつ
たようなのりである。

同

イデーヌワシントン

私共の待つて居た競技会も二月二
十日のあむがらぬなつた。

私達は在校生が勝つばよいと思ふ、
四年以下はず業生が勝つばよいと思
ふ、応援の人にはホコリの中で旗を振
る、選手は皆なに応援もしてなほい

、氣持ちになつて走る。こう云ふ凡
に皆な一生懸命になつたので、死数は
大体同位になりまゝだが終ひに在
校生が四、五夏休けまゝだ。

同

日高といふ

二月二十日のあさから、競技会があつた。始めの頃は在校生を応援して居たが、後々友人とたつちや人と私と三人で応援した。高跳幅跳なぞの時、勇次郎が去つたので、私等はうんと跳べよと何回も云つた。卒業生はもう一月も學校に居る事は出来ないのだと思ふと、何だか応援しなくなつて来た。合計は卒業生の方が四五勝つて居る。私は七、八を見てゐんだ。

同

兼地愛夏

兼一人で居た競技会も二月二十日の

高一 綴 方

二月二十二日 壬生 幸

時は迫りぬ、東の空が白々と明り染めし頃、我が軍の砲撃も目前に迫つて来た。敵の銃弾は雨あられの如く我が陣地に降つて来る。敵の前には堅固なる鉄條網が味方の陣地をにらみつけてゐる。如何にしてもこの鉄條網を破壊しなげればならぬ。幾組かの工兵隊は破壊筒を持って敵陣目かけて投入せんと試みしも鉄條網には達し得ぬ。こゝに到つて爆弾もろ共に飛び込む他はないと決心し、之に選ばれたのか不朽の名を残した江下、北川、依江の三勇士である。三人は堅く、沃心と笑とをうかべ、火薬に火を莫じて一目散にかけ出した。

書から始められた。

一番始めの男生は百米、彼々と進んで走幅跳があり、マラソンもありました。宿が力の限り、どちらにも一生懸命にたので、七十八社七十四、全くい、勝負だつた。

け、小共高等二年に福岡雪やんか戸たら、どんなに高等二年は勝つたらう。可愛慈に雪やんは死んでしまつたのである。全く惜しい事をした。去年私達のする番は、其の時、林啓が力を合せてやりうてはなないが、

あ、さんせい、



熱烈燃ゆるか如き愛國の至誠に士り鉄條網の一道筋は見事に破壊せられたのである。あ、此の三勇士こそ、未来の國民の手本である。此の思ひ出、深き日を永く記念すべきである。

幼かりし日

浅沼泰男

僕がまだ幼かった時のことであつた。野口の工場へ行つて遊んでゐた、すると工場の人かやり出しつきの舟をもつて来た。僕が「お、お」と言ふと、其の人は笑ひながら、「この川をめぐつたら此の舟をやら」と言つた。僕はすぐに「うん」と返事をしてよろこんで、ただかになつた。そして目をあけてもぐつたが、川はどふ水だつたのであつた。

とうとう舟をもらつて帰つて行つた。翌日も、舟をもらひが出来た。舟も又ど

こかに無くなつてしまつた、今考へると馬鹿な事をしたと思つてしやくにさわつてたまらない。

清書

奥山紀子

仰と言ふむづかしい父島だらうと
獨言を云ひながらスーと筆を走
らせてゐた、ボンと、柱時計が
淋しく十一時を報じた、二時同も
父島々と書いたけれど、二時同も
一枚も出来ない、今から綴方の宿
題もしなげればならぬのだと思ふ
と気がいら、筆を持つ手はふ
るへ初めた、気を落ちつける為、二
三分深呼吸をしてゐたらだん、と
気が持たなくなつて来たので筆を取
つた、一頁一畫を書く度に「普段お前
かたまけるから、いくら書いても清書
は出来ないう」と言ひ声が左右の耳

から入つて来る様で又気が、から、し初めた。

三月十日

奥山貞美

思ひ出湧き此の記念日、我が志勇の
兵士が肉をけつり血を流して戦つて
大勝利を得た日である、我等はこの
記念日に對して又思ひ出すのは彼の
満洲である、今はその満洲も日本の
為立派な帝國となつたではないか
榮えよ日本 菊池初枝
一八三五年の年の重大時期を目前に
ひかへて日に月に發展してゆく日東
帝國よ、國は小さくも其の意気は燃
るが如く世界の到る處に進出して行
く、今後の日本の消長は我等第二
の國民の腕にあるのだ、學問には
み國家の為につくし、益萬世一氣の天
皇、天地と共にまわまりなま、我が國を
榮えさせやう。

卒業生送別競技会後記

F Y 生

競技会も回を重ねる事此處に十一回、年々歳々好記録を作り其の進歩の俊
をみとめる、今年も期日の変更の已むなきに到り、大分気後けの概
態にあつた、此の分ではつまりな、競技会に終りはせぬかと思はれたが、
さて茲をあけて見ると仲々興味ある事として息がまる様な稽考もあつた、
去年の卒業組を十枚の差で煙々と破り勝利の栄冠を得た今年の卒業組だ
どんな物すごい得点で又記録をあげる事かと豫想した私は食器をな在校注
の練習をしつ、も数度か戦意を失ひかけた、又僅かに女生の力を頼みにし
ていた位だつた、勿論卒業組も三十三歳の差で勝つ熱意ではな
つたらうか、然るに結果に於て七十八対七十四、僅かに四歳の差に止
まらなかつた、先づ其の最大原因は彼の福岡雪子さんを失つた事ではな
かつたらうか、卒業組世望の花形選手であつた雪子さんの死であつた、
作戦上からも精神的にも奥に大なる打撃であつた、
雪子さんと病弱にて重態の荷も担ひ終つた競技会の重を心配してゐられた、
天國に眠れる雪子さんは競技会の勝利をどんなに祈つてゐられた事だらう、
第二の理由は期日変更の都合上予定の半日であつた事による、小人技の選
手から成る卒業組は出場回数が増え、わがず休養の暇もなく次の競技

に出なければならなかった。これも可成りの痛手になつたのである。

さて腹中に殺るとしやう。最初の百米走は奥一部君(在)の一番に、公道(在)武重(在)の喉で加尾(在)さんを抜くと云ふ元氣。それに引換へて鬼(在)君(在)は馬鹿に調子が戻るかつた。

女中の百米は藤(在)通(在)り在校組の温子(在)さん、イーデス(在)ちゃん、二着を取り、殊に温子(在)さんの新記録が六秒五分の三は實績に値する。

三秒(在)藤(在)通(在)り高平(在)君(在)の一等、二等の望(在)君(在)とは約一歩五〇の差があつた。次は女中のボ(在)ル(在)根(在)、鬼(在)乃(在)ち(在)や(在)ん(在)奈(在)加(在)ち(在)や(在)ん(在)純(在)子(在)ち(在)や(在)ん(在)ユ(在)キ(在)ち(在)や(在)ん(在)最(在)の(在)四(在)人(在)行(在)れ(在)とも(在)甲(在)乙(在)の(在)つ(在)け(在)ら(在)れ(在)ぬ(在)校(在)の(在)者(在)揃(在)ひ、

一かし遂に鬼乃ちやんの最後の一枚は三十二米十五で一等、今少し練習五つんでいたら三十二米八十

二の記録を破る可能は命令と思はれた。藤(在)君(在)校(在)組(在)の(在)高(在)平(在)君(在)の(在)原(在)則(在)は(在)レ(在)コ(在)ード(在)十(在)一(在)米(在)三(在)三(在)に(在)及(在)ば(在)ぬ(在)事(在)約(在)二(在)米(在)五(在)十(在)に(在)て(在)奥(在)一(在)部(在)君(在)の(在)一(在)等(在)、二等の記録(在)君(在)は(在)其(在)の(在)又(在)一(在)米(在)下(在)で(在)以(在)下(在)推(在)して(在)知る(在)べ(在)し(在)だ、

まだ、遊歩の念地を弁とむ。高平(在)君(在)の(在)出(在)場(在)を(在)見(在)な(在)か(在)つ(在)た(在)のは(在)少(在)々(在)淋(在)し(在)か(在)つ(在)た、作戦の都合もあつたらうが、レコードを目ざしての奮闘振りを見たかつた。在校組は全く

く破はず、鉄雄(在)君(在)後(在)彦(在)君(在)と(在)夾(在)つ(在)ぎ(在)早(在)に(在)落(在)ち(在)退(在)七(在)君(在)も(在)之(在)に(在)つ(在)ぎ(在)事(在)次(在)部(在)君(在)の(在)一

八舞台となつてしまつた。君もさぞかし張合の無かつたらう。

五十米ではスタートに於て練習不足のズ(在)子(在)さん(在)を(在)あ(在)げ(在)ぬ(在)は(在)な(在)ら(在)な(在)い、スタートのやり返へし四五回、いつかズ(在)子(在)さん(在)は(在)立(在)ち(在)お(在)く(在)れ(在)の(在)感(在)が

あつた。おしろこの人はボ(在)ト(在)ル(在)技(在)に(在)出(在)す(在)べき(在)では(在)な(在)か(在)つ(在)た(在)ら(在)う(在)か、これにしては彼の温子(在)さんが又新レコードを作り(在)六(在)秒(在)觀(在)衆(在)を(在)ア(在)ツ(在)と(在)云(在)は(在)た(在)のは(在)痛(在)快(在)だ(在)つ(在)た、まさに金鶏勲章に値するものだ、未だ六年生の若(在)木(在)君(在)も(在)い(在)い(在)お(在)嬢(在)さん(在)だ、

二等のイーデス(在)ちゃん(在)の(在)フ(在)ォ(在)ーム(在)も(在)実(在)に(在)い(在)い(在)で(在)す。まだ、延の事せう。コ(在)ミ(在)五(在)ち(在)や(在)ん(在)奪(在)とい、勝負だらうと豫感して

いたにもか、わらずゴ(在)ミ(在)ち(在)や(在)ん(在)の(在)頑(在)張(在)り(在)は(在)遂(在)に(在)及(在)ば(在)な(在)か(在)つ(在)た。お次は男生の四百米、どうなる事かと先にしてゐた種目であつた、高平(在)君(在)の(在)一(在)着(在)は(在)先(在)づ(在)奥(在)力(在)の(在)通(在)り(在)と(在)して(在)陪(在)君(在)庭(在)の(在)二(在)着(在)は(在)思(在)ひ(在)の(在)他(在)早(在)か(在)つ(在)た、

秀(在)中(在)君(在)は(在)紫(在)谷(在)調(在)子(在)が(在)悪(在)く(在)後(在)に(在)出(在)場(在)せ(在)ね(在)ば(在)な(在)ら(在)ぬ(在)マ(在)ラ(在)ソ(在)ン(在)も(在)思(在)ひ(在)や(在)ら(在)れ(在)た。女生の走巾(在)飛(在)は(在)伊(在)子(在)奈(在)さん(在)が(在)一(在)等(在)と(在)誰(在)し(在)も(在)思(在)つ(在)て(在)ゐ(在)た(在)ら(在)う、

どうした狂ひか二回も石(在)ヲ(在)ル(在)を(在)こ(在)り(在)返(在)へ(在)し、最後の飛躍に実力を発揮しながら後に下ろめき(在)名(在)を(在)成(在)し(在)得(在)な(在)か(在)つ(在)た(在)のは(在)返(在)へ(在)す(在)も(在)残(在)念(在)だ(在)つ(在)た、

本人の心(在)中(在)も(在)さ(在)ぞ(在)カ(在)し(在)と(在)お(在)察(在)し(在)する。ト(在)ヨ(在)ち(在)や(在)ん(在)奪(在)も(在)二(在)回(在)の(在)石(在)ヲ(在)ル(在)、之は練習の不足に起因するものと思ふ、かゝる競技には踏切の正確さ(在)が(在)第一(在)だ、

今後の良い教訓となりう。其の鳥(在)存(在)校(在)組(在)の(在)喜(在)惠(在)ち(在)や(在)ん(在)富(在)ち(在)や(在)ん(在)が(在)一(在)二(在)等(在)と(在)なり(在)豫(在)想(在)外(在)の

得兵を収めた。

學生の走中飛は勇次郎君(左)の一等、他の追従を許さず、高飛中飛と、差の好敵手もなく張命がなかつた事だらう。

よく呼物のリレー最初は女生組だ。百米五十米の結果で在技組の優勝は分り切つてゐた、只レフトドを破れたらと願ふのみだつた、スタートから在技組の温子ちやんが先頭にたつたが次の花遊ちやんの走路の思ひ違ひにはハラ／＼させられた、競技前の注意をよく聞き命なかつた為だ、これで卒業組と在技組の得兵の差は僅かに二英となつた、彼は男生のリレーとマラソンの二種目、競技は、よく白熱化して応援団も観衆も興奮が最高潮に達した、

スタートと一発、リレーのスタートを切られた卒業組のチ一部君が先頭だ、介君(左)が追つかける、一人で二週づつ、の八百米リレー。バトンの受渡しもあざやかに登君(左)と文雄(左)君がかけ出した、だん／＼と文雄君登君に接近しはじめた次の憲三君(左)敏雄君の番となつた、あつ遂に敏雄君は憲三君と追ひ抜いた、場内は百雷の一瞬に落ちた様な歓声、いよ／＼スタートの番だ卒業組には強豪広平君が相変らずニコ／＼顔でバトンを待つてゐる在技組の團扇君はかけぬいた、間もなく広平君が物すびースピードで追ひかけただん／＼一二人は接近しはじめた、團扇君もすびースピードで追ひかけた、

スタートと一発、リレーのスタートを切られた卒業組のチ一部君が先頭だ、介君(左)が追つかける、一人で二週づつ、の八百米リレー。バトンの受渡しもあざやかに登君(左)と文雄(左)君がかけ出した、だん／＼と文雄君登君に接近しはじめた次の憲三君(左)敏雄君の番となつた、あつ遂に敏雄君は憲三君と追ひ抜いた、場内は百雷の一瞬に落ちた様な歓声、いよ／＼スタートの番だ卒業組には強豪広平君が相変らずニコ／＼顔でバトンを待つてゐる在技組の團扇君はかけぬいた、間もなく広平君が物すびースピードで追ひかけた、

天下合戦日、マラソンは廣が出した、一着はどう丹でも勇次郎君(左)だらう、間もなくこれを実況した、敏雄君の二三口着と在技組の美次君(左)は持合せがなかつた、カ四百米にたつた、秀平君(左)は追ひつてゴールイン、(十対十三、これで又二真鍮より結局七十八対七十回と在技組は追ひつた、)であつた、敏雄君(左)は得兵と得た大半は女生の力であつた。流石は卒業組!! 遂に二年共に栄冠を得て母校を卒業したとしてゐる。此の意氣を以て卒業後も友人や社友に健闘を報へん事を希望する。最後に故福岡雪子さんの靈を勝利を以て慰め得たるを喜ぶ。

終り。

種目	順位		氏名	在東コード	記録	備考
	1位	2位				
100米(男)	6	5	橋本 五郎	15秒	菊池 安彦	在東組
100米(女)	3	8	小祝 温子	16秒5	佐々木 千叶	SD 卒業組
500米(男)	8	3	大川 慶平	11m02	ハリス ヴァンク	
500米(女)	6	5	板東 富乃	22m82	特礼 幸由	
1000米(男)	7	4	橋本 五郎	11m33	ハリス ヴァンク	
1000米(女)	8	3	持丸 勇次郎	11m48	世田 喜代	
2000米(男)	3	8	小祝 温子	8秒5	佐々木 千叶	
2000米(女)	6	5	大川 慶平	14m40	城 沼 寛	
4000米(男)	8	3	持丸 勇次郎	5m35	小祝 幸一	
4000米(女)	3	8	小祝 温子	4m09	小祝 幸子	
8000米(男)	3	7	小祝 温子	22m53	小祝 幸子	
8000米(女)	7	3	小祝 温子	22m18	小祝 幸子	
15000米(男)	10	12	持丸 勇次郎	6m14	鈴木 春吉	
15000米(女)	78	74				

昭和八年年度競技会成績表

高 二 の 作 文

競技会を了へて

菜池つね子

卒業生一同が待りに待った最後の送別競技会も去る二月二十日午後一時より開始された。此の競技会は私運にとつては是非勝たねばならぬ競技会である。それは云ふまでもないが、この一瞬間に反に對して申訳がない事である。もしや負けたらたらさう。反は如何に心淋しく思ふであらう。けれど我が選手が満身の力を込めてつた我が選手が何故負ける事があるらう。さだめしき反もあの天国にて私運と共に勝ちたる事を喜んでいてであらう。此の勝つたの喜びは皆男生の御蔭である。私運は勝つたのを喜ぶ

と夫に深く、男生に感謝して居る最後の競技会を勝戦!! 何と云ふ事ではないか。此の競技会を了へてからは重荷を下した様な気がする。何から行はれるものか。心から、
 其の日は少し曇つて居た。それによつて寒かつたので選手達は皆、一枚一枚の着るへて居る人々も、皆、僕等卒業生も標へた人々も、皆、いてい此者ふるのである。一言は、に百米をやつて6分の一、
 勝つて来たが女生が思ひ、
 い最後のマラソンが来た。「卒業生、
 奥座此の「戦」に在りだ!! だが心配、
 勿れだ、勇次郎君が一着だったの、
 に四美又在校生に勝つ事が出来た。

だが、に、女生の一番の選手である
福岡雪又さんが死んで了って女生が
まる夏になつたのを口惜しく思ふ。

和田邦康

流行性感冒が本島にはやつた為早く
終る折だつた競技会は延びて二月二
十日となつた。不幸の時運が悪く女
生才一の選手福岡雪又さんが病氣と
あり二週間も床につき苦しむつゝ、死
んで行つた。雪又さんを弔ふ為競技会
は延びた。二十日朝は曇つて居たが時
が経つとつ小て候々晴れて来た。選
手又さんが祈つて呉れたのだらう。選
手も応援も一つとなつて戦つた。終り
は速く74となつて結局四美の差で
勝つ事が出来た。

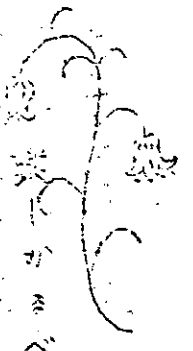
同

根東富夫

一月二十日の予定だった競技会が感冒の為、秋日に

なり、二月十八日の豫定日は私達同級生の雪又
人の脚不幸の為、止めなつて、愈々昨日の午後
からとなつたのでした。私達女生才一の選手福岡雪
又さんは一月三十一日は感冒で了つたので私達は心配
して居たが下度よく延びたので私達も安心して大
勝利の考で居たのに人な事にならうとは。

雪又さんのお墓参りに行く時、雪又さんの兄さんが
日の競技会を雪の為に勝つておくれ雪はともえ死に
て居たから雪の代りにおる人は雪の二人分だけや
と語られた。私達も気がなから死なれた雪
又さんの為にと覚悟しました。然し運悪く昨日は十三
日は皆駄目だった。まして雪又さんの出る筈だった競技
会。然し僅か四美の差で私達の勝利となった。
私達は雪又さんが居たらと云ふから夕方先生たちと
一緒に雪と報告をしようとした。
でも私達の力のある限り公明正大に競技をやつた
事と雪又さんも卒業の差で喜んで居て居る
と思ひます。



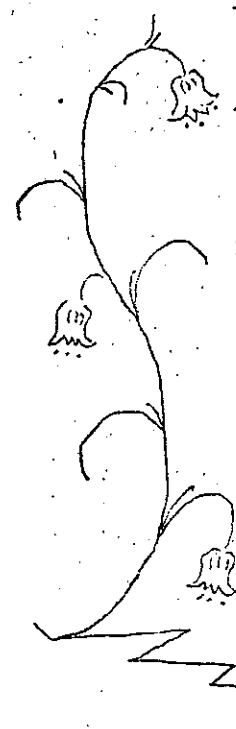
昭和九年を迎へて 故福岡雪又
新：下昭和九年を迎へて、昔に存在す
るすべて、物に昔年を懐いて来た。
昔年とは、昔に在りて早や十五年となり
春は八年同寺日友と一女とも思つて
来た学校も卒業する歳といひ目を目前
にみかへて昔年の心は如何でありやう。
今日は何事か非常時で昔年は一層心を
引締めるべきではあいかい、
古からの祖先が残りておいた立派な

業績を汚すか林にカメやう。昔年が
此の世に生れて来たのは、林に立派に
立てて行く大切な役目をする林に生
れて来たのであるからそのついで
一生懸命で勉勵して立派な人となら
う。
年の始から確り心を引締めて祖先に
恥下ない功を立て林にはなにか。

昭和九年を迎へて 故福岡雪又
新：下昭和九年を迎へて、昔に存在す
るすべて、物に昔年を懐いて来た。
昔年とは、昔に在りて早や十五年となり
春は八年同寺日友と一女とも思つて
来た学校も卒業する歳といひ目を目前
にみかへて昔年の心は如何でありやう。
今日は何事か非常時で昔年は一層心を
引締めるべきではあいかい、
古からの祖先が残りておいた立派な

故福岡雪又さんをお懐ふ。菊池に廿年
前までした。エツカ(雪)お人の心は一
年生の時、七ツ物まで、始終、雪又を
かかひ、教室でも取らふかつた。雪生
かからかふと泣き出した。三人兄妹
の一番末子である。エツカは高等一
年の頃、頃からせいがかずんぐりとして高
く私の肩位もあり、二人で道を歩く時

等取が「ワカと歩くと風が「い」と
 云ふと「お前が餘りちぶだから」と云フ
 て笑ひながら歩いた。指板持ら
 い鼻に汗滴の通つて「ワカはランニ
 ングの選手で前二十の大持株で
 エワカの家へは夜々廻んで行き
 等一階に居た事もある。見るからに
 次大でうぶ味を帯びた「ワカが今
 はもう此の世の人はおいと云ふ小幸
 を誰か信じてませう。メンチヨウの端
 術を愛し入院して二週同余り十八日
 を最長にあり毎に抜止られて了つた。
 其の向うに双匣して別人の跡になつ
 た「ワカがもう駄目だと云ふ十七日
 の午後三時頃、つくと時分友と三四人病院
 へかけつけた。
 あつた愛を世にやんが、かうまで度る
 ものにお上ははず目頭が熱くなつて注



きた。一
 望ちやんが喜んだ。田尻先生は速い返
 りぬ国へ旅立たれまゝ。私達に別れ
 告げず。とあるのを思ひ出して「あ、
 エワカも速いぬ国へ旅立つたのだから
 思おと人の生命のほかなすが思ふや
 りぬる。
 子を七く「た両親のなげき。妹を失
 った兄姉の心はどんなであらう。
 雪ちやん、美しい天國で田尻先生
 とお合ひあつたでせう。
 あ、若くして逝き「友よ永遠に安ら
 かにせいで私達を留守にしないで。

福園雪子さんを悼む

昭和九年二月十八日午前一時三十三分、遂に逃れ得ぬ運命とは知られながら
 是非に由助け度い兄弟の二人の深夜のお百度詣の祈願から歸つて言葉をはけ
 たかと思ふと叫喚は急に緩かになつて僅かに三度眠るやうに逝つた。
 雪子さんはほんちの助けかりたかつたであらう。幾度もの手術の苦痛もよくこ
 へた。其の後の處置の幾十回と背く繰返される度に看る者の方が却つて堪え
 ないに思ひがけられ、よく堪えた。どうして生きてたかつた。どんなにして助け
 けてもらひたかつた。四十度前後の熱もよく一ヶ月も續け得たものと不思議に
 思ふ。

親御さん達を初め兄弟姉妹一統様の手厚い看護も容易なことではなかつた。
 現社愛持おやあちと先生おの株山先生藤川先生達の心労も業々振の事では
 なかつた。同級生お是非助けあけ度いとどんなに心を痛めたことであらう。
 お醫者さんお眞剣であつた。知る者のすべては何とかして助け度いと念願した。

最も運命に遊んだ。運命だ。病命だ。
 親に先だつことは最大の不幸だと昔からいつてゐる。今まで受けた御恩は何
 事報ゆることが出来ず。最後までおの手厚い看護を蒙つて死んでしまつては

此の上もなほ不孝に相違ない。トカト自ら承めて死んだらてはなほ、眞に運命だ。誰か責めろことは出来ぬ。

死んでいんなを不孝者であつて誰か責めぬ。皆悟してゐる。眞に氣の毒に思つてゐる。どうが安らかに眠つて下さい。

雪子さんの死に依つてお友達は、

身体を氣をつけませう。やしもすうと程々に。かぢな若く者は氣をつけのやうに心掛けることと思ひます。

死んで親に涙を見せようやうなことがあつてはあらぬと深く息づかすことと思ひます。

大人になつて孝行しようなんと思つても何時死ぬかわからぬ。孝行は今のうちから常にすべきものといふことがよく悟れたことと思ひます。

何處死んでもすべしわくと悟りしめられたやうな人にならぬといはなければならぬ。ふつとよくわかつたことと思ひます。

二人の死んでいんなを雪子さんの念も、親孝行をするべきことと思ひます。

雪子さんの死んでいんなを雪子さんの念も、親孝行をするべきことと思ひます。

孝女

雪ちやん 一年 藤巻 さき子

呼んで見たとて歸らぬ友よ、雪ちやんはわづか十五歳の若い身を以てあの世へと旅立つてしまわれたのです。

一月の中頃から雪ちやんの身體の具合の悪い事は私達も知つて居りました。早く夫太になつて學校へ來られおやうにと毎日私は神に祈つておまつたのに、いよいよ大雪ちやんの親御さん達はどんなに雪ちやんにかつくとになつたでせう。そのかひもなくとら、かぢなかりになつてしまひました。私は雪ちやんのお顔を見ただけなんといつてよいかわかりませんでした。出るのには涙ばかりでした。あのなつかしい雪ちやんのすがたはどうしてわかれぬことは出来ません。

早朝の教室 二年 沢田 忠

いつも遅水勝ちは私が其の日は早朝の教室のドアもまだ開いておぬ。教室には誰も来ておぬ。廊下をゆく。と、足音が水を打つた後のやうに、と、第一のカアテンの始末をしてガラス窓に手をかけた。ガラガラガラと戸は明けた。雑作に明け行く窓から朝の空気がこもりと流水やうに入つて来て、空一ぱいにこもつた夜の氣をぬぐつて行く。廊下の窓を覗けるに、随つて教室は明るく、次第に染かいたて行く。いつにおく暗水時水に心持ちで外を見つと蒼く晴水渡つた大空には、二つちぎ水雲がかわり、と流水を渡る何とすか、朝だらうと思ひながら、の空を眺めておぬ。友が二人三人と見え、て教室は次第に賑はつて行つた。

或日のこと 二年 田中 フジ

「おや思ふにん女處に芽が。」
それは台所の流元の暗い一丈といた隙間の土の上であつた。褐色の殻がけがけし白い白い莖に青白い葉が芽を吐いてゐる。見るからに弱々しいさうな葉。ど一つと見てゐると何だかかう首を傾けて見上げてゐるやうで可憐らしい。

日の光の射りも射さないこんな處に如何して芽生え出たのだらう。自由に延びまわること許されぬこの芽の生命は最う最初から運命づけられ水でゐるのだ。日陰に短かく伸び早く芽てる生命なのであらう。人間だとしても同じだと思ふと思ふと何だか賤が熱くやつて來るのを覺えた。

送別競技會 二年 冰山 ソノ子

今年はお島の流行やり色々の都合で延び延びになつた卒業生の送別競技會は昨日行はれた。午前一時からいふので見物かたがた左横に出掛けた私の行った時にはもう男生の百米は終つたところだつた。結果はと異教を見ると悲しいかな卒業生が負けてゐた。續いて女生の百米であつた。スタートラインに立つた選手を見るとこれからは勝利は卒業生の方にあると心算つた。わがががと谷の合図と駆け出した選手は誰か買けまいと猛烈に走る。かゝり投擲らこれも立を重んじが負けた。左横するから皆眼に涙をためて泣き出しおせなかつた。淋しいさうな卒業生。去年の七月には懐かしい師を失ひ、今又二三日前に女生を脊負つて立つた選手の聲をきくと失つて……

でもあながち四安ではあるが最期の勝利を……

其の後の學校日記より

二月五日 幸五以上、文部省統等練習所練習船日本丸を乗學しました。

二月十二日 祝元節、可後合枝、遠國祭に参加しました。

二月廿日 種々の都合で延期に延期を重ねて居た送別競技會は本日午後

後挙行無事終了しました。

以上

昭和九年二月廿四日三号 大村尋常高等小學校ナリニ編輯部。

